第 8 回フォローアップ研修会

研修会に参加して

日時： 2011 年 11 月 26 日(土)～27 日(日)　天気：晴
場所： 手賀の丘少年自然の家とその周辺
参加者：44 名

森にやってきた。公園で昼食をとって少年自然の家に戻る途中、アスファルトに落ちているドングリが足元でプチプチと音を立ててつぶれた。目と耳から森が入ってきた。

開校式を終えると、野外実習前の座学が始まった。植物に残された樹皮のはがれ具合、枝の折れ方でどの動物が食べたのか、「なぜそうなるのか、考えることが大事」と、浅間先生は語った。わたしたちは指導員として森を歩くとき、下見で用意した自分の目の凝らし方を参加者に伝えていないか。そんな疑問がふっと湧いて出た。「下見では、あったはずなのに」このフレーズがいかに多いかと。待っていたように生き物はそこにあるはずはないのだと考えを新たにした。講義は動物の落し物にも及んだ。獲物を食べた動物はフンを残す。「フンの中身で動物の種類や獲物になった動物の生態が分かる」と。シカもおなかの調子が悪いタメフンを残す。シカもおなかが悪いときがあるのかと、シカに置き換える自分がいるのだった。

1 日目：自然観察実習
テーマ：「自然観察を盛り上げる技術」
講義：千葉県の動物　講師：浅間　茂氏
野外実習(15:00～16:30)2 班に分かれて
①鳥から環境を知る
②携帯電話で顕微鏡写真を撮る
活動報告のテーマと報告者
①里山整備でよみがえる野草　中山美代子氏
②獣医師が診たイケメンの動物たち　掘　泰洋氏
③こんぶくろ池の自然と今の取り組み　大貫遵子氏

野外実習では、土壌生物、水中生物の採取と観察をした。落ち葉の積もった土を掘り返すとムカデ、トビムシが動いている。持ち帰って観察するのに苦労した。トビムシは飛んでいなくなっていたし、持ち帰った虫たちも動きを止められず、観察には犠牲になってもらうことも必要だった。携帯電話のカメラでできる赤外線、紫外線写真、圧巻は携帯電話による顕微鏡写真で、特段の技術の必要ないのもすぐに使えるネタになった。

夕食後の事例発表は、市原市風呂の前のカタクリの里山保全、動物園から見た動物と環境、こんぶくろ池の取り組みだった。自然環境を保全したいという取り組みが「〇〇が生き続ける環境を残したい」という一人の情熱ではできない、人をひきつける運動・活動を見せられ、「そこへ駆り立てる思い」をつきつけられた。　　藤田　隆（松戸市）

顕微鏡を観て、写真の撮影

研修開催の部屋入口の多種多様な種の陳列に歓喜の声を上げて始まった二日目の研修会。柿、ピーマン、リンゴなど、手軽に入手可能な物を素材として、自分の手を動かしながら学ぶことで、タネの成り立ちに着目して植物を観察するという新たな視点を得ることができました。また、タネの観察後、植物達が生き残るために進化してきた過程を思いながら食べると、「命」をいただくという食に対するありがたみを強く感じられたように思います。タネから話題を広げた自然観察と食育を組み合わせたプログラムができたら面白いなと、活動の意欲が湧いてきました。

2 日目

「探し種！ 遊ん種！ びっくりし種！」

講師:渋谷孝子氏

①実とタネのはなし-果実を斬る！」-(講義と実習)

②種の謎を探る…顕微鏡などで仕組みの観察

自然観察

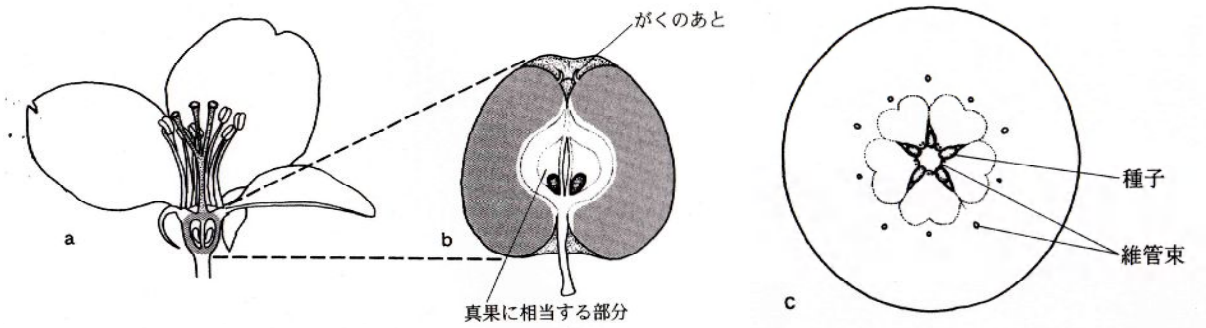
講師:大木陽子氏、小島紀彦氏、日野原純子氏

③自然観察…谷津田の観察　種を見つける

④種で遊ぶ…模型作り、種を飛ばす

手賀の丘周辺の里山を回る谷津田観察会では、担当の指導員の方のみならず、一緒に回っていただいている指導員の諸先輩方からも細かいフォローを頂きました。観察会の途中、指導員に促され、ゆずの木に目をやると、カマキリの腹部が連なったタマゴが目に入りました。これは一体どういうことだろうか？と疑問を持った次の瞬間、カマキリの腹部が僅かに動くのを見てハッとなりました。カマキリがまさに産卵の最中だったのです。それが皆に伝わると、観察会は歓喜の渦に包まれました。一生忘れない体験ができたと思います。丁寧な準備と、その準備を超える予測不能の劇的な瞬間に出会える自然観察の醍醐味を再確認し、スキルアップのみならずモチベーションアップも大いに叶う形となりました。

カラムシとフクラスズメを観察

お天気にも恵まれた二日間、素晴らしいフォローアップ研修会となりましたが、少し残念だったのは 30 代、40 代の参加者が少なかったこと。私自身仕事に忙殺される毎日で、参加に前向きになれない時もありましたが、本当に参加してよかったと思います。仕事や家事に忙しく過ごされている比較的若い世代の方々にも、次回は、多数参加していただけたらな～ と願っています。　　福井千尋（館山市）

リンゴの花と果実の形態： a 花の縦断面 b 果実の縦断面 c 果実の横断面